



令和7年1月1日発行
宍野半事績講究会
特別号



新年を迎へ謹んでお慶び申し上げます
皆様のご健勝祈念申し上げます

宍野半生誕百八十年を迎へた昨年、國學院大學武田幸也先生により「国学者としての宍野半」の論文が発表され、原口泉先生を会長に「宍野半事績講究会」が設立されました。本誌では学術論文の一部を紹介いたします。



宮内庁三の丸尚蔵館所蔵明治十二年 明治天皇御下命
「人物写真帖」より宍野半(三十七歳)

国学者としての宍野半

武田幸也

宍野半事績講究会の発
起人の方々より巻頭言
をいただきました

宍野半大人命を偲び奉
りて

京都皇典講究所

京都國學院院長 田中恆清

宍野半大人、其の扶桑教初代管長としての赫々たる令名は、小職も固より存じてをりましたが、平田派国学者としての足跡、殊には皇典講究所の創設に尽瘁されたといふ、我等後学の徒が現に蒙つてをります高恩

につきましては、此度武田幸也氏の論考に接し、更に認識の度を深め、感謝の思ひを新たに致した次第であります。

宍野半大人が皇典講究所創立に向け力を尽くしてをられた時代、我国には急速な欧化・近代化の波が押し寄せ、ともすれば西洋より伝来した思想・文物の攝取に精力を傾注する余り、日本古来の伝統文化を軽視するが如き風潮も国民の間に浸透してゐたやうに見受けられます。斯かる中、荏再と手を批いてをれば祖先の

遺風は廃れ、子孫臣民が俱に護持継承すべき珠玉の皇典類も其の多くが失はれて仕舞ふであらう、然れば今こそ我等が立ち上がらねば、と喚る穴野半大人の下に同志諸賢の熱誠が結集せられ、茲に皇典講究所は漸々草創の秋を迎へる事を得たのであります。

一品有栖川宮職仁親王の令旨を奉じ明治十五年十一月四日、東京市麹町区飯田町に皇典講究所が設立せられ、其の分所として京都市

下京区烏丸通綾小路上に我が京都皇典講究分所の開設を見ましたのは、同十八年十月二十四日の事でありました。然るに皇典講究所の創設に多大な功績を遺された穴野半大人は、既に其の前年の明治十七年五月、行年四十一歳、皇典講究所・國學院の生長発展を見届け

る事なく、余りに早く重厚雄渾なる人生行路を駆け抜け文字通り道半ばに幽明境を異にして仕舞はれた。其の事実を顧れば今にして尚、

哀惜の念を禁じ得ぬ所であり、大人命の生誕百八十年、帰幽後四十年を算へます本年、令和の大御代を生きる皇国の民の一人として、今こそ此の偉大なる斯道の先駆者に対し報恩感謝の誠を捧げ奉ると共に、畏れ乍大人命の御霊には行末遠く天翔けり国翔けりて我等を見守り導き給へと慎み敬ひつつ乞祈奉る次第であります。

出版に寄せて

学校法人國學院大學

理事長 佐柳正三

令和四年十一月、國學院

大學はその前身である皇典講究所の創立から数えて、百四十周年を迎えることとなりました。本学はよく知られますとおり、建学の精神を「神道」に、教育の根幹を「国学」に求めた希有な大学であり、わが国有数の歴史を持つ私立大学です。そして本学の研究・教育の

理念は、諸学問を通じて日本の伝統文化を明らかにし、国や地域への貢献、国際社会の発展に寄与するともに、自己の個性を最大限に發揮することのできる人材を育成することにあります。かかる本学の創立は、激動の明治維新における拙速な欧化をみて、日本の将来の発展のためには、伝統文化もまた尊重しなければならぬとの氣運が高まり、幕末以来の国学者が数多く結集したことにあります。

このことを承けて、明治十五年に神職養成と古典研究を主たる目的とする、この皇典講究所が創立されることとなったのです。

本論文の主人公である穴野半氏は、教派神道である扶桑教の初代管長として著名ですが、本論で示されたように、薩摩藩の藩校や京都の皇学所、平田家塾等で国学を学び、神道事務局の幹事を務めた人物です。この穴野半氏が皇典講究所設立にあたって、その幹事と

なり、松野勇雄氏等と協力して、多くの国学者を結集したことによって、皇典講究所が設立されることとなり、その歴史は今に至っているのです。

本論文を通じて國學院大學の設置に尽力した穴野半氏の事跡が広く知られることを、祈念しております。

『国学者としての穴野半大人』

志學館大学人間関係学部

教授 原口 泉

武田幸也氏の詳細な御研究により穴野半の生涯と功績が新たな視点で明らかにされました。その論点は書名に明らかです。単行本としての刊行を心よりお喜び申し上げます。

穴野は平田派国学者として近代日本草創期に国学研究の基盤となった皇典講究所(國學院大學前身)を創設しました。総裁は有栖川宮

職仁親王、副総裁の岩下方平は鹿兒島藩家老、幹事の穴野は薩摩出身。前年の明治14年、神道事務局幹事に穴野と折田年秀、神道副総裁に岩下が就任、宮以外はすべて薩摩出身でした。

明治15年穴野は扶桑教第一世管長にも就任しました。明治5年教部省出仕以来、

穴野は平田派の国学者として富士山信仰の神仏分離を徹底し、その神道化に献身しました。徹底した姿勢は鹿兒島藩における廃仏毀釈の激しさと軌を一にしています。鹿兒島藩における廃仏の動きは島津斉彬から始まり、元治元年(1864)

には島津久光が廃仏を幕府に建言し翌慶応元年から本格化、廃仏が戊辰戦争の鹿兒島藩の軍勢力を支えました。鹿兒島藩では仏教寺院を全廃、明治2年島津家は神道葬を執り行いました。

「御一新」と「万国対峙」をスローガンとした明治維新を近代政治革命とすれば、穴野は近代宗教改革を断行し

たと言つてよいでしょう。薩摩の平田派人脈がその担い手でした。文豪海音寺潮五郎など國學院大學には鹿兒島人脈が脈打っています。

出版に寄せて

宍野史生

このたび、武田幸也先生により国学者としての宍野半の事績が論説されたことを嬉しく思う。従前より明治期の国学、すなわち明治国学の研究は些か浅いと感じていた。それは平田派の勢力の失速により政治力学的観点から「国学者の働きは国家形成に影響がなかった」との誤謬ではなからうか。それは、現代の偏狭な価値観がもたらした現象と感ずる。祭政一致を目指した明治国家建設には神道・国学・古典思想が根底にあり、三条教憲に見られる、忠君愛國・敬神崇祖の神道的観念に基づいて形成され

た明治国家への全否定によるものでは無からうか。

薩摩国隅之城に生まれた宍野半は明治5年に教部省に出仕し翌6年3月に現在の富士山本宮浅間大社の初代宮司として着任する。富士宮市史は「宍野宮司は、平田国学が神道国教を唱えて教部省に送り、さらにその実践のために浅間大社に派遣した神道官僚と見てよいと思われる」との見解を示している。明治政府は富士山こそ国家神道であるべきと考え、半はそれを忠実に実現したのではないか。その後、半は神道事務局の運営と皇典講究所の創設に力を注ぐ。半は師の平田鏗胤や矢野玄道らが構想しつつも国学派と漢学派の争いで停滞していた教育機関の創設こそが国民教導へ切要と考えていたと察する。(それはキリスト教への防禦も含まれていたのではないか。)

今般、明治国家建設の一員として働いた半の事績の

一端が示された事を機に今は岩下方平、三島通庸、山之内時習、後醍醐院真柱、田中頼庸、深見速雄、川上彦十郎、葛城彦一など薩摩出身の国学者の働きが闡明されることを期待したい。

著書から一部を抜粋しました。

皇典講究所の創立をめぐる

さて、神道事務局幹事となつた宍野半が情熱を注いだ事業に皇典講究所の設立がある。そもそも神官教導職の分離は祭祀と宗教の分離を意味したが、この過程で近代における国学研究の基盤となつた研究教育機関、すなわち皇典講究所の設置による教学の分離が構想されていくこととなる。明治十四年七月九日に松方正義が三条実美に提出した建議書には、「教義ト学事祭儀トヲ分離スルニアラザレバ、

政教混淆、管理上猶支梧ナキ能ハズ」とあり、教学を分離する必要を指摘した上で、「過般會議之際、右学生之義モ改正擴張ノ目的略相決シテ、未ダ之ヲ実施スル能ハザル、職トシテ費金支出ノ途ナキニ之レ由レリ」と神道事務局の生徒寮を擴張していくこととなつたが、その費用に苦慮していたことが記されている。

明治十五年二月一日、神道教導職總裁有栖川宮職仁親王が皇典講究所總裁に任じられ、二月四日には、「明治十五年ヨリ向十年間、年々金貳千四百円宛御下賜ノ旨、宮内卿ヨリ御沙汰アリ」、皇典講究所の創立が本格化する。四月には皇典講究所副總裁に岩下方平、皇典講究所幹事に宍野半が任じられ、六月には創建係が置かれて松野勇雄が就任した。八月には幹事長に櫻井能監、幹事に宍野、幹事補に松野が補され、二十一日に皇典講究所設立願を山田顕義に提出した。そこには「神官教

導職分離相成候二付、当局従前之生徒寮ヲ止メ、専ラ国典ヲ研究スル為メ、皇典講究所ヲ設置致候」とあり、二十三日に聞き届けられている。

ここで、宍野半が皇典講究所の幹事に任じられたのは、皇典講究所が神道事務局生徒寮を擴張したものであつたからであろう。そのため神道事務局幹事として皇典講究所の幹事にも就任したと考えられる。また、前記したように宍野が有栖川宮職仁親王から信頼されていたこともあろう。さらに、皇典講究所創定期の教員である平田派を中心とする国学者とも宍野が信頼関係を構築していたこともあつたように思われる。

〈中略〉

なお、皇典講究所の創設にあつた宍野半は特に有栖川宮職仁親王との交渉を担当したようであり、『一品宮御隠邸雜記』には「皇典講究所幹事」として宍野の往来が記録されている。例え

ば、明治十五年八月二十一日には「来月一日ヲ以、皇典講究所開齎致度テハ、当日 総裁宮御成被遊候様御執達被下置度、予メ此段申進候也」と宍野からお伺いしており、二十五日には「皇典講究所規則」と「教程表」を上申している。また、九月二日には宍野が「別紙記名之者共、今般入学願出候ニ試験致候処、及第二依り、即チ齎費生・自費生共本日採用、直ニ引続キ授業相始候間、右御執達被下度、此段申進候也」と皇典講究所の状況について報告している、等の動向が窺われる。

さらに、明治十五年九月に宍野は、井上頼圀、久保季茲、松野勇雄、古川豊彰、石垣甚内との連名で皇典講究所設立の趣旨を、
 全国精英ノ少年ヲ募集シ、専ラ国典ヲ講明シ、礼学ヲ修習セシメ、其心志ヲ鞏固ニシ、其徳性ヲ涵養セシメ、兼ヌルニ漢洋ノ学武技体操ノ術ヲ以テシ、其ノ才識ヲ博メ、其元氣ヲ養ヒ、以テ国家有用ノ人物ヲ陶冶シ、国体ヲ万世無疆ニ保維シ、皇道ヲ四裔ノ外ニ発揚スル大基礎ヲ立テントス
 と説く告文を發した。
 右のような経緯を経て、明治十五年十一月四日、有栖川宮幟仁親王の台臨を仰ぎ、皇典講究所の開校式が挙行された。この時、宍野は接待掛を拝命している。かかる皇典講究所設置にあつたての宍野の役割を、三矢重松は「宍野氏と先生（筆者註）松野勇雄のこと）とは経営者なり」と評し、

宍野半氏は鹿兒島の人、駿河大宮の宮司を辞して扶桑教を統督して芝愛宕下に住し、経営の才に富み、皇典講究所幹事たる外に又神道事務局の幹事たり。此の人嘗て書を櫻井社寺局長に贈りて「松野は年若に候へども尋常書生と異なり」云々と推奨せしことありといふ、先生の之が引立を受けられしは事実なり。宍野氏は書生を愛し之に接近するを喜ぶ方にて、日比谷の生徒寮にも時々訪ひ来り、十六年の新年には新設講究所の教師生徒を其の居に招きて酒饗を供せりといふ。かく宍野氏は名のみ幹事にはあらざれども、懸持多く定勤の人にあらざりしかば、創建係として幹事補たりし先生が首脳として経営の任に当たられしも亦事実なり。と、宍野によつて松野勇雄が見出されたことを記している。このように宍野一松野ラインの尽力によつて皇典講究所は創立され、宍野の破後は松野勇雄が皇典講究所を支えていくこととなるのである。

さらに、宍野半が精魂を傾けた皇典講究所が創立された後の、明治十五年十一月十日、宍野は有楽町にあつた神道事務局旧生徒寮に寄宿する皇典講究所生徒を自宅に招き晚餐会を開いた。この時、宍野は生徒達に、不日飯田町へ移転するに付いて、余は諸君に望む所あり、該所へ移れる後は、五ヶ年一切世事に閑せず、心を修学に専にして、身を国家に委せ、一己の爲めを思はず、皇道の真理を明らめ、学成る後は、勉めて国家に尽す所あらんことを。と切望した。如何に宍野が皇典講究所の教育に期待していたかが窺い知られよう。だが、明治十六年十一月、宍野半は病を得、十二月には重態となり、明治十七年五月十二日に歿した。十三日、松野勇雄は有栖川宮幟仁親王に「幹事宍野半死去ニ総裁宮ヨリ為祭染料金五十円下賜相成候様取計仕度」と上申、十四日、有栖川宮幟仁親王は使者を遣わされ、「鏡餅料金千疋」と「榊料」が下賜された。十九日には嗣子宍野健丸に代わり、小沢彦遅と伊藤六郎兵衛が「権大教正宍野半死去之節者、祭染料、並に種々下賜御礼上申」のため有栖川宮邸を訪れた。

発行元
宍野半事績講究会
 会長 原口 泉
 〒899-1565
 鹿兒島県始良市
 平松峰丸262

本号をもつて新年のご挨拶の賀状とかえさせて頂きます。

